

馳、被災地へ!

5月2日 石巻市

人の絆と感謝の心で再興すべきだ!

◆石巻市民憲章◆

まもりたいものがある。
それはいのち、いとなみ、豊かな自然。
つたえたいものがある。
それは先人の知恵、郷土の誇り。
たいせつにしたいものがある。
それは人の絆、感謝のこころ。
わたしたちは石巻で生きてゆく。
共につくろう、輝く未来。



石巻市の日和山公園からの展望



日和山公園でお会いした、東京シュレの奥地代表はじめボランティアスタッフの皆さん



女川町の遠藤教育長



石巻専修大学での、物資積み降ろしを手伝ってくださったピースボートのスタッフ

1 蛇田中学校

午前5時、自宅前を出発。一路、仙台へ。被災地支援と視察。救援物資は、土のう袋1600枚、プラスチック食器2000個、ティッシュ段ボール2箱、子供用おもちゃ・付録付き雑誌。

午後1時、最初の訪問地である蛇田中学校体育館に到着。ここは、近隣4地域の避難所となっている。また、蛇田中学校は先週より学校再開。つまり、避難所と教育活動が同居しているのだ。菅総理は「8月のお盆前までには、仮設住宅に、希望者全員が入居できるようにする!」と、豪語しているが、平地の少ない沿岸部では、結局、小中学校のグラウンドしか確保できない。それですら、仮設住宅用土地が足りない、との声も。

蛇田中は、生徒数500名余。ここの体育館に、避難者が200名。プライバシーは、あってなきがごとしの環境。

避難所の生活ぶりを視察後、中学校の校長室で、斎藤校長より、お話をうかがう。ただでさえ新年度が開始となり、抱えきれないほどの校務分掌。そこに大震災で、児童生徒への配慮が負荷された。教員自身も被災者。家が全壊や半壊、家族が犠牲に...そういう環境下にある以上、十分、加配教員を申請できる、いや、すべき対象だと感じた。また宮城県教委からは加配定数を申請できる場合の要件が、厳格に示されているようでもあり、ここは、文部科学省に問いただしておく必要がある。強風の中、グラウンドで体育の授業に、汗を流す中学生を横目に見ながら、移動。

2 貞山小学校

午後1時50分、次の訪問地の石巻市立貞山(ていざん)小学校へ。こちらでは、斎藤校長にお話をうかがう。

「学校は、いつから開始されましたか?」「4月21日に始業式、22日に入学式。25日から午前授業のみ。集団下校も行っています。」「どうして、午前授業なのですか?」「学校給食が間に合わないのと、教職員の業務が追いつかないからです。子どもを受け入れる準備のためにも、先生にもウォームアップ期間が必要です。GW連休明けには通常授業にしたいのですが。」と、学校運営に頭を痛めている様子。

懇談させていただいた校長室は、カーペットが剥がされて、コンクリートがむき出しになっている。「どうしたんですか?」「膝上あたりまで学校も床上浸水したんですよ。ようやくここまで掃除したんですが、カーペットは泥だらけで使いものにならず、はかしたままで、体育館のフロアも波打ったままです!」「体育館にも泥が入ったんですか?」「はい。自衛隊の皆さんのおかげでなんとか泥はかきだしたんですが。その体育館も、避難所にする予定なんです。体育の授業はできませんし、全体集会は多目的室ですしかありません。」「人事は、兼務発令ですか?」「はい。被災した教員は、車のローンと家のローンを二つ抱えて、勤務校も二つ抱えて、それに小学校の先生は女性が多いですから、勤務に家事と子育てと介護、本当に大変です...」「国に対して、何か言いたいことはありますか?」「小学校は地域の避難所です。でも、貞山小学校は水没しました。水も食料もありませんでした。今後は、地域の避難所として、水没しないような整備をお願いしたいんです!さらに、備蓄倉庫としては以下の物資は常備が特に必要です。缶づめ食糧・水・毛布・ティッシュ・燃料・緊急時電源・赤ちゃんミルク。」

3 石巻中学校

午後2時40分からは石巻中学校。境校長に、お忙しい中を面談していただく。

「学校は、いつから始まりましたか?」「4月21日始業式、22日入学式です。でもそのあとは臨時休校です。」「え?どうしてですか?」「校舎も、体育館も、避難所になっているからです。」「そんなに?」「ここは高台にあります。海岸に近い小中学校のある地域は、火災でやられたんです。...そうだった、テレビで見た。町が燃え盛っていた、それがこの地域だった。

「だから、海岸に近い市街地の小中学校近隣の皆さんは、多い時では2000人が、この石巻中学校に避難されていました。今日現在は302人です。ここから2次避難所へと移られています。」「臨時休校の間、子どもたちはどうしているんですか?」「ボランティアとして、できることをするように指導しています。それと、午前中は部活動に来てますよ!部活動には全員が参加することになっているんです!」それで、校舎の周りに中学生をたくさん見かけたわけか!

「学校給食は、どうなりますか?」「石巻市は3つの給食センターがありました。そのうち二つはだめになりました。稼働しているのは一つだけです。授業開始しても当分はパンと牛乳だけです。栄養価の高いものを与えたいのですが、牛乳とパンがあるだけでもありがたいことです。」「被災した生徒や、教職員はいますか?」「もちろんです。就学支援金を活用して対応しますが、はやく安心させてやりたいですね。教職員は特別休暇を活用して、自分の家のこともなんとかやっています。」

「避難所となっていますが、今後の見通しは?」「グラウンドに仮設住宅を造る予定ですが、それでは教育環境としては、影響が大きすぎます!と、こちらも言葉を選びながら、政府の仮設住宅建設無計画ぶりに、いら立ちを隠せない様子。

「被災した方々は、生活できる居住環境とともに、経済活動が必要なんです。この1ヶ月間、泥掃除しかしていない石巻市民が、どんな想いを抱えているかの再興を目指しているかを、政府の皆さんも見てほしいと思います!」と、こちらでも教育者らしく言葉を選びながらも、核心をズバリ。

4 日和山公園

午後3時45分、季節外れの強風にあおられながら、日和山公園へ

日和山公園は石巻市ほぼ全景を眺望することができる高台にあり、市民憩いの場所。この日和山公園から見える風景こそが、大震災の生の姿だった。

津波から、もう50日以上経っているというのに、どこもかしこも、がれきの山で、車は何台もひっくり返っている。電柱も、あちこちで倒れており、家もビルも商店街も焼け跡。なにか、空爆の跡のようにも見える。パイロットで観た空爆の跡よりも、ひどい。呼吸ができなくなって来て、背筋が身ぶるりする。

この惨状を、菅総理はじめ閣僚や、国会議員全てが、目に焼き付けるべきだ。与野党で生産性のないいさかいを、遠い永田町でしている暇があれば、この現場に来るべきだ。

そして、為すべき特別立法や予算執行を、即、実行すべきだ。がれきだらけの街中にも、自衛隊の皆さんのおかげで、何とか道はある。その道を、何かを探るように、多くの市民が右へ左へと歩いている。

「この街は、どうやって再興すべきなのか」ここは、今歩いている人たちのふるさと。ここは、生活の場所であり、思い出の場所であり、将来の世代に、いつまでも残していかなければならない場所。

私たち、国会議員は、自分の選挙区だけでなく、この被災地こそが、日本の現状だと認識すべきだ。自分が、ここに生まれて、ここに生活している、その存在意義を知るべきだ。日本人とは何だろうかと、気づくべきだ。勝手に未来はやってこない。自分たちで、作り上げるべきものだ。歴史は、誰かに守られるものじゃない、当事者が守るべきものだ。石巻市民憲章にある「人の絆、感謝のこころ」で再興すべきだ。

5 女川町教育委員会

午後5時10分より女川町臨時教育委員会へ。女川町第2小学校の校長室が、臨時教育長室となっていた。遠藤教育長に時間を取っていただき、お話をうかがう。

「女川町は、高台以外はほぼ全壊ですが、いつから学校を再開されたのですか?」「4月12日に始業式をしました。出島(いづしま)と江の島のふたつの島があるのですが、自衛隊の皆さんが救出してくださったおかげで、子どもたちの居場所としての学校を再開できました。」「どうして、そんなに早くできたんですか?」「町の協力や宮城県学校給食会の協力、それからマスコミ報道のおかげで、救援物資がいち早く届いたからでもあります。子どもが学校に行けば、保護者もここにいなければなりません。学校再開こそが、女川町復興の希望なんです。...なるほど、そういう発想は、マニュアルではできない。

その後、学習計画や進学対応についてお話をいただき、その上で教育現場が必要とする支援は何かと聞きすると、「保護者が失業状態なので、仕事をください。それから高校受験用の参考書がありません。辞書も流されてありません。子どもたちのメンタルケアも必要ですので、スクールカウンセラーや、心理療法士が必要です。そういう意味で、養護教諭や生徒指導や教科指導の加配定数を願っています。」との答え。また遠藤教育長は女川町の将来を見据えて、こうも言った。「女川町は1メートル20cm地盤沈下しました。満潮時には冠水します。何とか企業誘致できる街に戻し、経済的な営みができるようにしてください。雇用の確保をお願いします。そうでなければ町民が外へ流出してしまう。」

このあと、学校内を視察させていただく。全国から寄せられた学用品や、運動靴など、きれいに整理しておかれている。職員の皆様の努力のほどが良くわかる。ピロティの一角には、手作りの図書館もあった。子どもたちの学ぶ環境を、なんとかして整えてあげようとの配慮が、そこかしこにあった。

6 石巻専修大学

来た道をそのまま通って、石巻専修大学へと向かう。道中、交差点のガードレールに打ち上げられ、そのままになっている車の反対に、学習塾

の明かりを目にする。こんな状況下でも、勉強しようと励んでいる子どもたちと、それを支える人たちがいることに、希望を垣間見た。

もうすっかり暗闇になった石巻専修大学に入ったのは、午後7時。ここは、ボランティアセンター本部。ここの資料倉庫に、持ってきた救援物資を届ける。土のう袋、スーパー軍手、おもちゃ、雑誌、プラスチック食器、ティッシュ。車いっぱい、トリス状態で積み込んだ物資をすべて下ろすと、少しは責任を果たせたような気持ちになる。

そのまま、教室内で行われていた分科会に出席。ボランティア部隊を仕切る会議。それぞれの分野での活動報告が行われ、必要な情報交換が行われ、そしてボランティア村の運営が決められていく。仕切っている内容は、以下の通り。

- メディカル ●リハビリ ●エンターティメント ●整体マッサージ
- マッドバスターズ(泥掃除回収) ●ローラー(チラシ配布) ●理容美容 ●心のケアチーム
- 炊き出し(ちなみに、5月2日は14団体7820食。5月3日は15団体9110食)
- がれき回収 ●漁具回収

これだけのボランティア活動を、日替わりのボランティア軍団を率いて仕切るのだから、それはもう、凄いの一言。やっぱり、スタッフがいて、仕切り役がいて、そういうプロの軍団がいないと、被災地への支援は回らないということだ。

会議が終わる頃にはすでに時計は8時をまわっていた。